

## 映画から見るエジプト

——喜劇王アーデル・イマームとともに——

報告 八木久美子

二〇一四年十二月十一日、総合文化研究所において、「映画から見るエジプト——喜劇王アーデル・イマームとともに——」というタイトルで、本学非常勤講師の勝畑冬実先生による講演が行なわれた。

勝畑先生は早稲田大学大学院で中国史を学ばれたあと、高校で世界史を担当され、さらに本学の大学院でアラブ・イスラム思想を研究し博士号を取られたというユニークな経歴の持ち主である。中東の映画に興味を持たれたのは、高校の授業で教材として映画を使ったところ、生徒の関心が一挙に高まったことがきっかけだという。最初はやはり、日本での評価も高いイラン映画を見ていたが、その後、アラブ世界を研究対象にすることで、関心がアラブ映画、とくにアラブ映画の中心地であるエジプトの映画になったということであった。

当日の話の流れは、まずエジプト映画産業史を概観、続いてエジプトのみならずアラブ映画の大物であるアーデル・イマームという俳優の出演した数多くの作品の中から代表作について分析、最後に近年の作品にみられる新しい傾向についてであった。タイトルのとおり、話の焦点はエジプト映画のありようがエジプト社会の政治社会的な状況と密接に結びついていることに当てられた。

エジプトは「ナイル川のハリウッド」と呼ばれるように、中東・アフリカ世界随一の映画大国である。エジプトで制作された作品は、近隣アラブ諸国で必ずと言っていいほど上演される。最近では娯楽も多様化しているが、近年までエジプトの人々にとって映画は最大の娯楽であった。映画館は週末ともなればいつも満員だったのである。

コスモポリタンな雰囲気を持つ地中海岸の町、アレキサンドリアにエジプト初の映画館が誕生したのは一八九七年であり、エジプトにおける映画の歴史は長い。一九二五年には映画会社が設立され、一九三〇年には初めての長編映画「ザイナブ」が発表されている。その後にやってくるのがエジプト映画の黄金期といわれる時代であり、さまざまなスタジオが活発な活動を見せ、一九三六年にはヴェネツィア映画祭にも出品している。

しかし一九五二年に革命が発生し、共和国になったエジプトにはカリスマ的な指導者ナセルが登場するが、この事態は映画にも影響を及ぼした。一九五九年にはカイロ高等映画学院が設立され、リアリズムを追及する新しい潮流が映画の世界にも生まれる。一九六三年には映画産業もまた、国有化される。その中で発表された「ミイラ」（一九六九年）は現在でもエジプト映画を代表するような芸術性の高い作品として記憶されている。

ということだ。しかしその一方、革命以前の自由な雰囲気が失われたことを嫌い、多くの映画人が国外に拠点を移した。作品数は減り、映画公社内の腐敗、墮落などの問題もエジプトにおける映画界の状況悪化に輪をかけることになった。

一九七〇年、ナセルの死により大統領になったサダトは映画産業を再び民間部門に移す。エジプト映画界は活気を取り戻すが、今回の発表の主人公であるアーデル・イマームが俳優として活躍し始めるのはこの時代である。この時代、より正確には一九七〇年代末から一九八〇年代初頭からエジプトではイスラム復興現象が顕著になり、イスラム主義者の声が大きくなるが、このことはアーデル・イマームの出演する映画にも影響を与えることになった。

講演の中では、アーデル・イマームの数々の作品の中から代表的な作品をいくつか挙げ、そのなかでイスラム主義者がいかに描かれるかという点の絞って分析が行われた。アーデル・イマームは俳優であり、監督ではない。しかしながら、エジプト社会では総じて監督は存在感が小さく、俳優のほうが広く認知されている。さらにアーデル・イマームのように映画界を代表するような大物俳優になると、彼の意向が大きく作品のありようを決定していることは、彼の作品に一貫性があることからもうかがえるのである。

イスラム主義者という点、あご髭を生やし、イスラムの規範の厳格な遵守を声高に主張するというのが一般的なイメージだが、アーデル・イマームが演じるとうとうなるのか。一言でいえば、批判的に描かれている。「テロとカバール」(一九九二)および「テロリスト」(一九九四)が示すとおり、そこに登場す

るイスラム主義者は規範の形式的な遵守にしか関心がない。その浅薄さが笑いの対象にされるのだ。

アーデル・イマームの作品の特徴は、喜劇でありながら、強烈な風刺が効いているという点にある。もちろん、腐敗した政治家、有力者も手厳しく批判のやり玉にあがる。だからこそ、彼の作品は人々に愛され続けているのである。しかしながら、彼の映画に高い芸術性があるかと言われると、答えに窮する。エジプト映画が日本ではまったく評価されていないのは、取り上げられるテーマに人類共通の普遍性といったものがなく、エジプトの現実を知らない者には理解が難しいからではないかという点が指摘された。

最後に、近年の若手監督による作品にはこうした状況を打ち破るようなものがあること、アーデル・イマーム後の展開が始まっていることが紹介された。一例として取りあげられた、アイテン・アミーンという女性監督による「ヴィラ69」(二〇一三)は、不治の病を抱えた初老の建築家とその人生の最後になって家族との新しい人間関係を作り上げていく様子を描いたものであるが、その一部を見ただけでも作品としての完成度の高さはわかった。

今回の講演には、イラン映画に造詣の深いアジア経済研究所の鈴木均先生もご出席くださり、イラン映画との比較の視点から貴重なコメントを頂戴した。またアラビア語を学ぶ学生を中心に多くの学生が参加したが、講演終了後、学生たちが興奮した様子で勝畑先生の周りを囲んでいた様子は印象的であった。